

（2）小樽市立朝里中学校

「地域の避難所体験会」

報告者：北海道社会福祉協議会 福祉教育専門委員 長多 賢志

視察日時：令和5年10月30日（日）9:00～12:30

視察場所：小樽市立朝里中学校

○学校の概要

小樽市立朝里中学校は、昭和22年に設立された歴史のある学校であり、住宅地区の発展に伴い、小樽では生徒数も多く、落ち着いた中にも活気がある学校である。

現在、学級数が1学年3学級、2学年3学級、3学年3学級、特別支援学級3学級の計12学級、生徒数が263名。教員は33名（臨時講師含む）。

校区には、朝里・新光・朝里川温泉地区で、海あり、山ありと、四季を通じて様々な自然が整っている環境である。また、令和2年からはコミュニティスクール制度（学校運営協議会）を導入している。

○活動における特色など

小樽市立朝里中学校は、日頃から地域行事に積極的に参加し、生徒と地域住民のつながりを深めている。また、令和2年度から学校運営協議会を設立し、地域に開かれた学校づくりを進め、図書館の一般開放・リサイクル活動・避難所体験会など、先進的な取り組みを進めていることが特色といえる。

（小樽市立朝里川中学校「学童・生徒のボランティア活動普及事業協力校推薦書」より）

○視察内容

朝里中学校を避難所として想定し、生徒が地域住民と合同で避難訓練・避難所体験会・炊き出しなどを行う活動である。

《当日のスケジュール》

9:00～ 避難所運営についての講話

9:30～ 小樽市総務部災害対策室より災害の心構え講話
防災グッズの紹介（段ボールベッド・自家発電機）

休憩

10:00～（約60分）「DOはぐ」の概要説明・グループ毎の実践

11:20～ 町内会（南町会）の先進事例発表

11:25～ 陸上自衛隊より災害に係る体験談

11:45～ 炊き出し試食会（豚汁）

講話は防災士の資格を持つ朝里中学校教員と市の防災担当者より、朝里地区の地域特性や災害規模予測、またそれに伴う日頃の心構えなどの説明がされた。朝里中学校では日頃の授業等からも防災訓練を導入し、意識を高めているとのことであった。防災グッズ体験では、開始間もないことから、生徒の緊張感、消極性が見てとれたが、住民からの声掛け・促しもあり、ダンボールベッドの作成や試用などに生徒が徐々に参加していく場面がみられた。

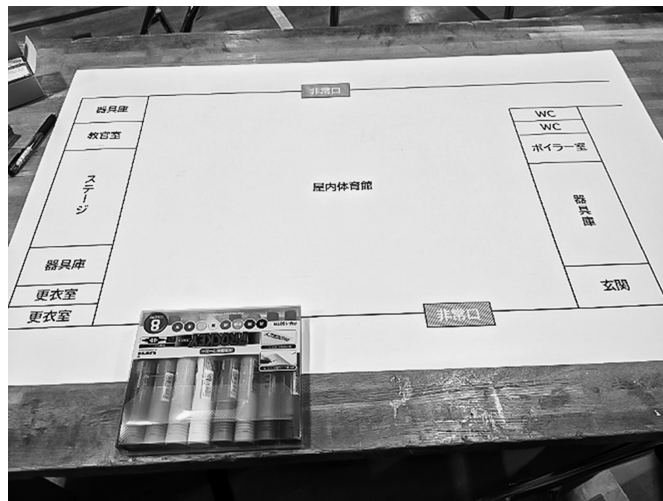
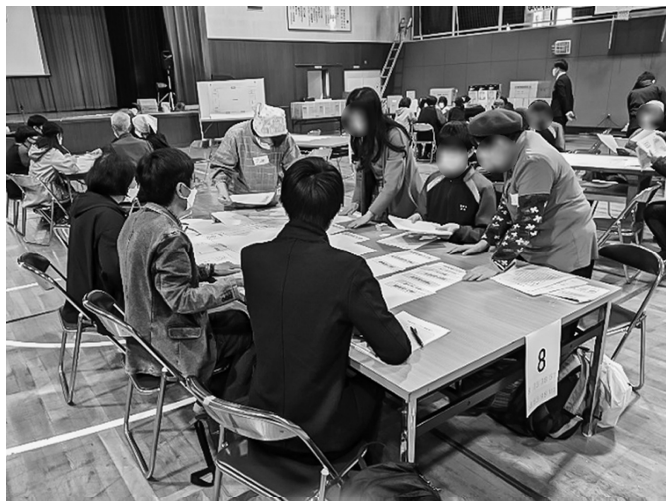
実際に道具に触れることで、使い勝手や快適性などを体験していた。

「DOはぐ」は、住民・生徒・関係機関なども一緒に参加し、1グループ5～8程度のメンバーで実施。実際の避難所として「朝里中学校体育館」が設定され、災害時の状況は雪が降るといった北海道の気候など地域性を考慮した内容であった。

実際の避難所運用を想定すると、生徒にはやや難しく感じるかもしれないが、カードを使ったゲーム性の高さが

ら、避難場所の設定・イベントカードの対処法など学生から発言・提案する様子も伺え、住民との交流がはかられていく様子を感じ取られた。また、ゲームの進行上、次々と避難者が読み上げられ、様々な出来事、トラブルが発生していくことは、実際の災害場面でも十分に考えられる。その様な時に、住民・生徒が共通の課題に対して一所懸命に向き合う姿勢も感じられた。ゲーム自体に正解は無く、一緒に話し合うことが重要なのだと感じた。

その後の事例発表・体験談などを経て、豚汁の試食会となり、豚汁の調理なども学生が参加し、町内会の婦人会と協力し炊き出しを行った。温かい食事を摂りながら、参加者同士で交流する様子が印象的であった。



DOハグ体験

○感想と考察

小樽市立朝里川中学校の取り組みは、「学校運営協議会」が中心となり、開催された活動である。林教頭から話を伺った際に、元々は地域と中学校自体の関りは少なく、そこには壁が感じられていたとのこと。その壁を解消し、「地域に開かれた学校を運営していきたい」との思いから、令和2年度から本協議会の運営が始まった。当初は地域の理解も十分ではなかったが、学校施設の一般開放から始まり、防災に関しては「中学校は避難所指定されているので一度場所を見に来てください」といった、入り口（垣根）を低くし参加を促していったと伺った。設置して3年と短い期間ながらも、元々あった関係性に加えて、アプローチ方法が「防災」という暮らしの共通課題として認識しやすい項目であったことから、活動が進んでいったものと推察される。

また、このような福祉の学習・ボランティア活動に対して、なかなか生徒が興味を持ちにくいといった印象がある中、初めのきっかけや導入には学校・教員の力が必要だったが、生徒が参加し地域交流を持ったことでの成功体験ができ、地域からも感謝される関わりから、モチベーションにつながり、少しずつではあるが、生徒からの希望者も増えてきているとのこと。

「子ども達が、学生の頃から地域や社会とのつながりを持つことで、自主的な提案、広い発想力を養い、ベンチャー企業など新しい世界に羽ばたいていける人材になっていってもらいたい」という林教頭の言葉が印象的だった。

今回の視察を通して感じられたことは、学童・生徒のボランティア活動普及事業は、単にボランティア活動を行う、精神を養うといった領域に留まらず、広く「地域共生社会」の考え方、活動にもつながっていると感じられた。それは、地域共生社会の視点にもある「誰もが支え合う社会」に他ならない。体験会の中でも「中学生は、助けられる人から助ける人」になることができる、地域の担い手の一員であるとの話があった。子どもだから、学生だからと守られるだけではなく、それぞれの役割や能力を活かして地域活動を行い、活性化させていくことがこれからは必要になる。

ただ、地域との関係性においては、自分自身が暮らしている場所（地域）でさえ、どんな所なのか？どんな人がいるのか？わからない…といった関係の希薄さは、少子高齢化や社会状況が変化してきている昨今において大きな課題の一つとして挙げられている。

そのような課題を解決し、地域全体で支える仕組みは、一朝一夕でなるものではないが、今回のような体験を通して地域交流がはかられていくことで、地域全体の意識も変わり、人・もの（建物・物品）が地域の資源になっていくのだと実感した。

また、このような取り組みを展開していくためには、各関係機関をつなげるコーディネーターの存在が必要不可欠である。特定の人・場所に負担がかかってしまえば、せっかくの取り組みも長続きはしない。重層的支援体制にも示される、市町村全体で支えるといった視点が求められ、その体制（つながり）を整備する為にも地域ごとのコーディネーターの重要性が感じられた。ただ、それを担うのが誰なのか？（教員・住民・専門機関）といった課題は残るところである。

今回「防災」という、共通の話題を通して、地域の様々な動きや人と人とのつながり、参加の機会を生みだしている取組みを伺うことができた。より良い地域作りの一環として、これからも本活動が発展していくことを期待する。



防災グッズ体験